■第３期旭区地域福祉保健計画について

（１）現状

【旭区民および旭区の現状（「データでみるあさひ 2019」より）】

○18 区中**高齢者人口**は１位、**老年人口比率**は３位、**年少人口比率**は 10 位、**生産年齢人口比率**は 17 位。
○**高齢者単身世帯**の割合は、横浜市全体が 10.4%に対して 12.4%と高い。
○**要介護要支援認定率**は７位、**認定者数**は１位で増加傾向にある。
○**昼夜間人口比率**は 80%で 18 区中 14 位。住宅地が多く、区外で働く人が多い。
○**人口異動**の推移をみると、平成前半の社会減少傾向は落ち着き、ここ 10 年ほどは社会増減が少ない傾向。
○**宅地の土地利用構成割合**は 61.7%で 18 区中 16 位。**田・畑と山林面積**は 22.5%と 18 区中５位。区面積にしめる**都市公園面積**の割合は 5.52%で 18 区中３位。
○**都市計画道路整備率**は横浜市全体の 68.5%に対して旭区は 42.1%で 17 位。
○**商店数**（小売業及び卸売業）は平成 10 年あたりからずっと連続して減少。
○**自治会町内会加入率**は 78.9%で、他都市と比べて高い横浜市(73.4%)の中でも高い。
○**犯罪発生件数**はこのところ減少傾向が続く。**交通事故発生件数**はこのところ横ばい傾向。

【旭区区民の意識（「平成 30 年度旭区区民意識調査」より）】

○**定住意向**は 73.9%であるが、緩やかな減少傾向。（平成 26 年度 75.7%）
○**住み心地**の評価は増加傾向で５割強。特に末子が未就学児の子育て家族の評価が最も高い。
○**生活環境の満足度**は、20～39 歳が最も高い。
○**公園・水辺の遊び場や緑地の整備**に関する満足度が高い。20～39 歳の女性から「大規模な公園」を誇れるとして高評価。
○都心に程近いのに**閑静な住み心地**に関する満足度が減少。
○**行政に取り組んでもらいたいもの**上位５項目は、１位＝歩きやすい道路の整備、２位＝バスや鉄道の利便性（満足度も高い）、３位＝高齢者福祉、４位＝災害対策、５位＝商店街の振興などまちの活性化であり、いずれも増加傾向。
○**地域の住民同士が取り組むべきもの**上位５項目は、１位＝防災・減災や災害時への備え、２位＝住民同士の交流や助け合いの促進、３位＝高齢者、障害者などへのサポートや見守り、介護をしている人への支援、４位＝子どもの見守りや子育て中の人への支援、５位＝交通安全や防犯であるが、防災・減災のみが増加傾向で、その他は横ばいか減少傾向。
○**旭区地域福祉保健計画（きらっとあさひプラン）を知らない**と答えた人は８割。

【３期推進中の社会・制度の変化】

○少子高齢化や人口減少の進展、世帯の小規模化、住民同士のつながりの希薄化、非正規雇用の拡大等、社会状況は大きく変化。
・「我が事」と「丸ごと」をキーワードにした**地域共生社会づくり**。
・「**ＳＤＧｓ**」（Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標）の理念に基づき、「すべての人に健康と福祉を」といった 17 の大きな目標と 169 のターゲット設定。
○国における法改正・制度の見直しが進む。
・平成 27 年４月の**生活困窮者自立支援法施行**により、社会的孤立に対して地域の中で支援につなげる体制、多様な主体の連携による見守りや社会参加の場づくり等に取り組む事が明記。
・平成 28 年３月改正で、**社会福祉法人の地域における公益的取組**への責務が明記。
・平成 29 年３月に策定された**成年後見制度利用促進基本計画**により、**権利擁護支援の地域連携ネットワークづくり**等が求められる。
・社会福祉法には平成 29 年６月公布。**包括的な支援体制の整備**に関する事項について盛り込む計画策定を求められる。

（２）第３期計画の成果と課題

計画書

＜課題＞
○専門用語が多く表現が難しい。
○構成が複雑、項目が多すぎてわかりにくい。
○区全域計画と地区別計画の関連が不明確。
○振り返りに基づき分析・評価を効率的にするための仕組みづくりが必要。

区全域計画

＜成果＞
○生活支援体制整備事業の推進により高齢者や年代を問わないサロン・居場所の充実、小地域での移動支援・買い物支援の充実
○障がい者作業所などによる地域貢献的社会参加の増加（サロン、地域清掃、配食等）
○子どもの居場所や多世代交流の場の増加
○徘徊 SOS ネットワークの体制整備、発見協力機関・協賛店の拡大
○ケアプラザと連携することにより、地域で幅広い対象にウォーキング等の健康づくりを普及啓発、取組の増加
○地域ケアプラザの整備計画満了（市内最大の 13 館が設置）

＜課題＞
○課題に対する具体策が十分に示せていない。
○高齢者中心の取組（計画）だと思われており、子育て世代の関心が得られていない。
○計画や様々な取組をより多くの区民に知ってもらう必要がある。
○生活支援体制整備や生活困窮者自立支援等、庁内外の連携が必要な取組が増加している。

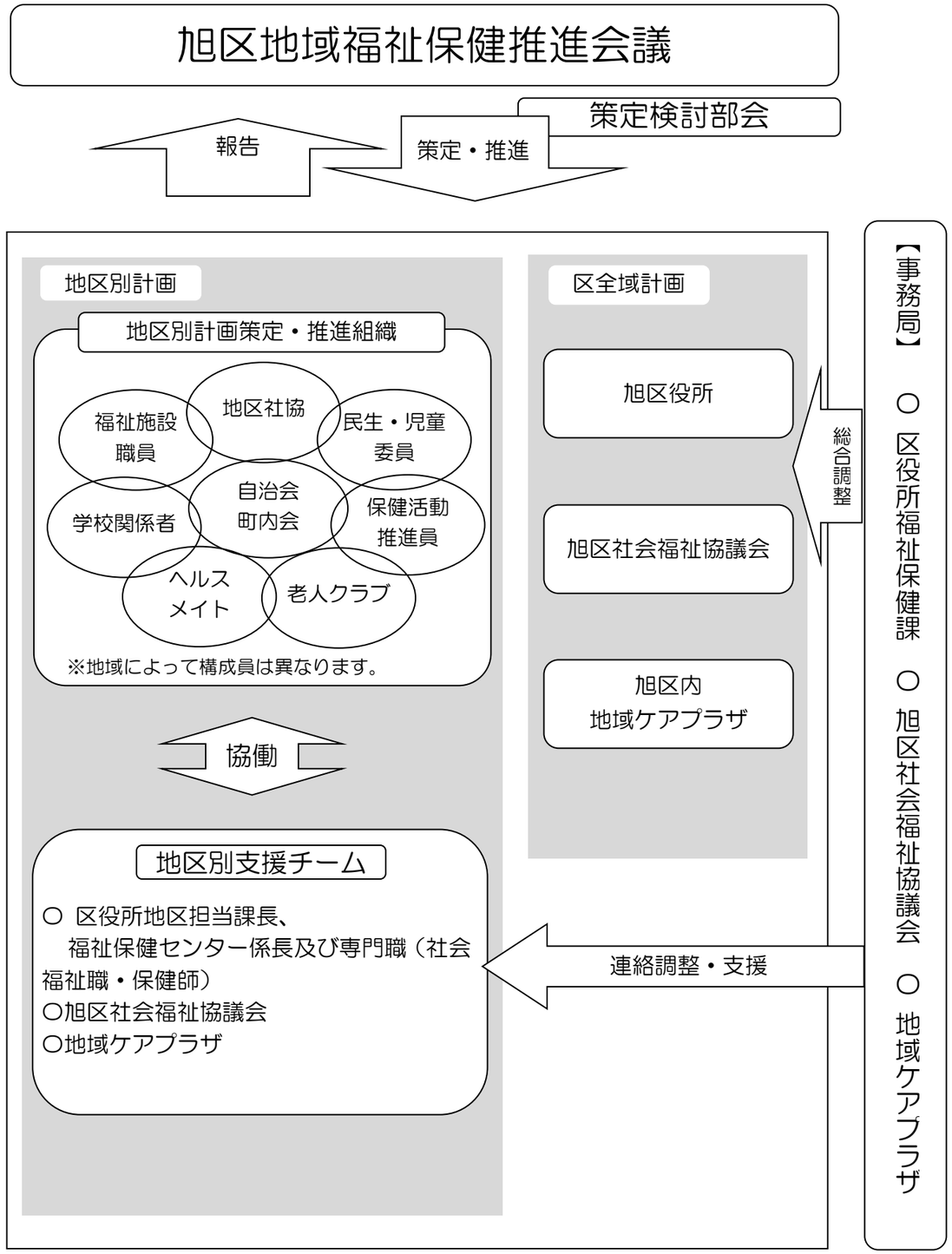
地区別計画

＜成果＞
○従来からの地域行事に加え、ウォーキングやスタンプラリー、三世代輪投げ大会等の新たなイベントや多様なサロン活動等を実施し、「住民同士の交流促進」、「多世代交流の促進」、「日頃から顔の見える関係づくり」等を促進。
○災害時要援護者支援の体制づくりや障がい児者との交流、高齢者等の買い物支援の取組等により、「安心して自分らしく暮らせるまち」、「安心・安全なまち」を推進。
○従来からの高齢者等の見守り、小学生の登下校時の見守りに加え、住民ボランティアによる生活支援や移動支援の取組等により、「見守り、支え合いのまちづくり」を推進。
○ジュニアボランティアの地域での活動受け入れや、学生と一緒に地域清掃を行う等により、「次世代の担い手育成」を推進。
○災害時要援護者支援の第一歩として、障害特性の理解や当事者との交流等に取り組む地区が増加。

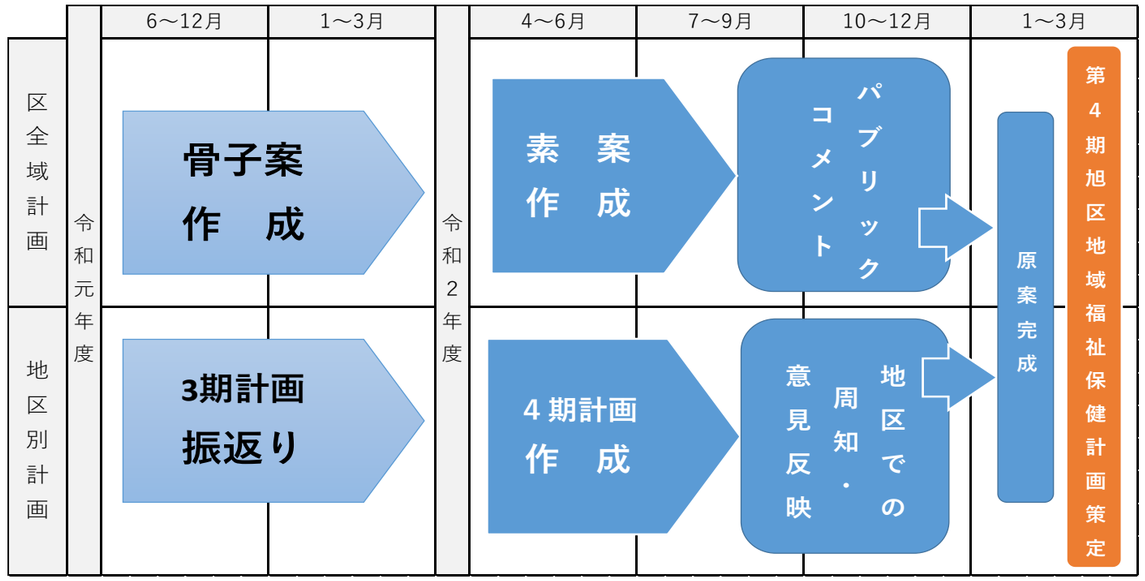
＜課題＞
○担い手不足に対し、アンケートによるボランティア募集や個別の声かけなど行い、新たな担い手が発掘された事例もあるが、更なる人材発掘が必要。
○幅広い年代に向け、健康づくりの取組を通じた地域参加やつながりづくり、担い手育成の取組拡大が求められる。
○イベント型の取組が重視されるが、参加者に目的や意図が上手く伝わっていないことがあり、工夫が必要。
○小地域でのサロン活動、生活支援の充実など、見守り・支え合いの仕組みづくりが必要。
○推進組織等、特定のメンバーだけの取組とせず、地域の様々な組織・団体の取組やネットワークに広げていくことが必要。

■第４期旭区地域福祉保健計画に向けて

（３）計画策定・推進体制



（４）検討のスケジュール案（検討の進め方）



年	月	会議名 等	内　容
令和元年度	6/26	第１回 地域福祉保健推進会議	・第３期計画振り返り ・第４期計画策定の方向性 （スケジュール、策定検討部会メンバーの選出等）
	8/5	**第１回　策定検討部会**	①旭区の現状説明、第３期区計画の中間評価 ②第４期区計画の枠組み、方向性 ③地区別計画策定の手引き案 ④団体ヒアリング方法・内容・対象団体
	8～10月	関係団体ヒアリング	＜スケジュール目安＞ ・８月　各団体へ依頼、日程調整 ・９月～10月中旬　ヒアリング実施 ・10月下旬　ヒアリング意見まとめ
	10月中旬	**第２回　策定検討部会**	⑤区全域計画の骨子案の方向性 ⑥区全域計画の内容、具体的な取組（意見交換） ⑦評価指標・評価方法（意見交換）
	11月下旬	**第３回　策定検討部会**	⑥、⑦継続 ⑧具体的な取組等の内容検討
	１月中旬	第２回 地域福祉保健推進会議	・４期計画の現状と区全域計画の素案 ・地区別計画の策定スケジュール
	３月	地区別計画策定依頼	
	３月下旬	**第４回　策定検討部会**	・区全域計画（まとめ）、地区別計画
令和２年度	５月下旬～ ６月中旬	**第５・６回　策定検討部会**	・旭区地福計画の素案（まとめ）
	７月下旬	第３回 地域福祉保健推進会議	・パブリックコメント実施了承
	10月	パブリックコメント	
	１月	第４回 地域福祉保健推進会議	・推進会議としての計画確定
	２月	計画として確定、印刷製本	

■第４期計画で大切にしたいコンセプト

○わかりやすい計画

・誰もが親しみをもって理解できるわかりやすい計画とする。
・「目標」と「具体的な取組」相互の関連等をわかりやすく表現する。
・「区全域計画」と「地区別計画」の関連をより明確にする。

○認知度を高めて計画を推進

・区民の約８割の人が「計画を知らない」状況を踏まえて、認知度向上を図る。
・地域の方々が策定し、多様な主体（区民、企業、地域組織、地域施設、行政、等）が協働して進める計画であることを理解してもらう取り組みを行う。
・計画を進めることが、地域活動の活性化や地域人材の発掘・育成等につながることを普及啓発する。

○これまでの取組成果の上に、さらに蓄積

・３期にわたり積み重ねてきた取組を大切にし、さらに係わりやすい工夫を加える等で継続を図るとともに、新たな時代の要求に応える取組を徐々に加えていく。

○「見守り・支え合い」などの取組を充実

・「社会的孤立」を始めとする生活課題・地域課題に対して、「見守り・支え合う」関係を大切にする。
・地域の多様な主体が参画し、様々な社会資源がつながることによる身近で日常的な仕組みを盛り込む。

○対象を限らない視点

・“全ての人に持続可能な”という「ＳＤＧｓ」の理念を踏まえ、世代やハンデキャップの違いなどを問わず「誰もが」同じ地域の仲間として受け入れられ、認め合うことを基本とする。
・特定の方や生活課題・地域課題に特化することなく、誰もが対象となる内容で構成する。
・誰もが「支え手」であり「受け手」でもあることを前提とした取組を計画する。

令和元年度　旭区地域福祉保健推進会議（190626）

委員からの主なコメント

大切にしたいコンセプト	主なコメント
わかりやすい計画	・３期計画はわかりにくい（同様の意見多数）。 ・取組項目が多すぎることに加え、項目の内容に重なりがある。 ・やさしい言葉で表現してほしい。 ・推進・策定の組織がわかりにくい。 ・本来は地区別→区計画→市計画なのでは？
認知度を高めて計画を推進 （区民意識調査結果「８割の方が知らない」と回答、また、若年層は詳細まで知っている人が０％という報告を受けて）	・ターゲットを意識して啓発をしていく必要がある。 ・ジョイナステラスなど若い世代が集まる場所を活用した啓発がいいのでは。 ・計画に関わる地域の方々から一般の皆さんに発信ができていないのでは？ ・民児協の中でも認識について聞いてみたい（会長会で）。 ・自治会への周知が必要（社協について知ってもらう必要がある。）。 ・社福法人の PR で企業に依頼し若い層向けのイベントを企画し成果が出た。 ・地域、行政、関係機関が個々の関係になっており縦割り。情報共有できておらず、もったいない。 ・自治会に入っていない情報がある。総務部との連携ができていない。 ・福祉大会でも自治会と一緒に取り組んだ事例を紹介すべきでは。
これまでの取組成果の上に、さらに蓄積	・３期の続きが４期計画であり大きく変わることはないのでは。
「見守り・支え合い」などの取組を充実	・障害がある方たちへの見守りも意識してほしい。 ・ひきこもりのケースは長期的な見守りが必要。（後見的支援制度の紹介）また、経過などについて周囲の理解が必要。本人に向けた支援と地域向けの啓発が必要。 ・消費者被害が深刻。ヘルパーなどの訪問がない世帯には地域の目が重要。 ・法人の地域貢献では双方向性の連携が必要。
対象を限らない視点	・誰もが支え手であり受け手であるという考えは一番大事。 ・障害がある人が得意なことを活かして地域貢献していけることに注目してくれるのはありがたい。 ・子どもに関わる取組も重視すべき ・乳幼児を抱えたママもスキルを持った貴重な人材。受け手だけではない

各取組について

・ケアプラザの障害児者に関する事業では、当事者も交えて色々なことを決めてほしい。
・多世代交流が大切。ケアプラザを最大限活用すべき。
・災害時の要援護者支援は施設との連携の仕組みが必要。

その他

・旭区にしかない取組として、ジュニアボランティアがある。中学・高校での福祉活動につながっている。ジュニアボランティアの母親との交流にも取り組んでいる。
・当事者抜きでものを決めないでほしい。
・高齢により免許を返納したが、やはり不便がある。区として対策を考えてほしい。

令和元年度　旭区地域福祉保健推進会議　委員名簿

（五十音順　敬称略）

職名等	氏　名
旭区医師会	相澤　一喜
旭区社会福祉協議会	池田　宏史
福祉と保健の生活課題を考える会	岡田　朋子
旭区肢体不自由児（者）父母の会	梶原　喜久子　（※）
旭ケアマネット	洪　正順
旭区保健活動推進員会	齊藤　由紀子
旭区地域自立支援協議会	白鳥　基裕　（※）
旭区老人クラブ連合会	中野　文雄
旭区地域子育て支援拠点　ひなたぼっこ	中村　廣子　（※）
旭区内社会福祉施設　弥生苑	西山　宏二郎
旭区障害児者団体連絡会	林　正男　（※）
旭区社会福祉協議会ボランティア分科会	眞鍋　貴子
旭区民生委員児童委員協議会	峰松　雅子
旭区訪問介護事業所連絡会	山内　明美
旭区連合自治会町内会連絡協議会	山岸　弘樹

※ 包括運営協議会終了後からの参加となります。　〔以上計 15 名〕

第４期旭区地域福祉保健計画　策定検討部会　名簿

（五十音順　敬称略）

所属団体・職名等	氏　名
旭区民生委員児童委員協議会 主任児童委員　代表	入江　ゆきよ
福祉と保健の生活課題を考える会 旭区地域福祉保健推進委員	岡田　朋子
社会福祉法人アドベンチスト福祉会 （市営ひかりが丘住宅ＬＳＡ受託法人）	下山　直樹
旭区民生委員児童委員協議会　上白根地区会長	鈴木　載代
旭区民生委員児童委員協議会　旭北地区会長	高田　充枝
旭区地域自立支援協議会 まどか工房（生活介護事業所）　施設長	新倉　朋矢
旭区老人クラブ連合会 二俣川ニュータウン地区老人クラブ	坂東　英夫
旭区保健活動推進員会　希望が丘南地区会長	紋谷　笙子
旭区地区社会福祉協議会　白根地区事務局長	渡邊　敦子

〔 計９名 〕